

〈報 告〉

中学生の攻撃性と学校適応との関連

—中学生用機能的攻撃性尺度 (FAS) の作成を通して—

田中 純夫*・山田 泰行**・杉浦 幸**
 菊地 奈美**・今野 亮**・水野 基樹***

The relationship of aggression and adaptability in the classroom
 of junior high school students

—From the view point of the development of a functional aggression scale (FAS)
 for junior high school students—

Sumio TANAKA*, Yasuyuki YAMADA**, Miyuki SUGIURA**
 Nami KIKUCHI**, Ryo KONNO** and Motoki MIZUNO***

キーワード：機能的攻撃性，関係性攻撃，ストレスコーピング，学校適応

1. 目 的

今日の児童生徒の不適応行動の主要なスペクトラムは、「いじめ」や「キレる行為」に代表される対人攻撃行動であると考えられる。こうした観点から、児童生徒における自己統制などの自我の機能的側面と主体性などの自我の自律的側面の双方の発達の諸相を捉えながら、逸脱行動の生起にかかわる対人場面での認知・意識・行動の諸特徴を測定し分析していくことが、現代の教育場面で起こるさまざまな問題を解明していくうえで重要な課題だと考えられる。

自己統制の不良がより深刻となる思春期の子ど

もたちの攻撃性を解明する研究は不可欠であり、特に行動次元における機能や認知的決定過程から攻撃行動の発生メカニズムを説明できるような尺度を開発する必要性が指摘されている(大淵他, 1999¹⁾)。児童生徒の暴力や攻撃性を主要なテーマとする研究は近年増加しており、その成果も蓄積されてきている。特に攻撃性そのものを下位カテゴリーで類型化し、多面的に行動面や心理面の特性を明らかにしようとする研究が徐々に積み上げられている(Dodge & Coie, 1987²⁾; 坂井・山崎, 2003³⁾; 玉木, 2003⁴⁾)。

児童生徒用の攻撃性の測定では、行動傾向という観点からの測定尺度を含んでいる坂井ら(2000)⁵⁾の小学生用攻撃性質問紙(HAQC)が近年開発されている。また一方では、内的特性から個人差を説明しようとする大淵(1999)¹⁾の機能的攻撃性尺度(FAS)も開発されており、暴力犯罪や非行との関連性から検討されており、子どもの問題行動の発生メカニズムを説明するうえでも有効であると考えられる。本研究では本来は成人

* 教育心理学研究室

Seminar of Educational Psychology

** 精神保健学研究室

Seminar of Mental Health

*** 体育心理学研究室

Seminar of Psychology of physical education

**** スポーツ経営組織学研究室

Seminar of Organizational Behavior

をも含めた対象において作成されたこの尺度を、中学生にも適用できるようにカテゴリと項目内容を精選し、再構成して短縮版を作成することが第一の目的である。そして、この指標が、実際の生徒の学校適応状況をどのように説明できるか、また、ストレスコーピングの方法とどのように関連するのかを検討することがもう一つのねらいである。

2. 方 法

(1) 調査内容

1) 攻撃性尺度

大淵ら(1999)の機能的攻撃性尺度(FAS)を中学生に適合させるように短縮版を作成する。4領域14カテゴリ54項目なる尺度を、4領域10カテゴリ38項目で再構成した。

①「回避・防衛」(猜疑心)(被差別感)、()内は下位尺度②「強制・影響」(競争心)(自己主張)(支配性)(低い言語的スキル)(低い葛藤対処スキル)③「制裁・報復」(偏った信念)(報復心)④「同一性」(自己顕示性)の4領域10下位尺度のうちから、中学生の発達段階や認知レベルおよび問題行動の特性を勘案して、38項目を採用し表現を簡略化するなどの改良を加えた(表1)。各項目について「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの5段階評定で回答を求め、1~5点と得点化した。

2) ストレスコーピング尺度

大竹ら(2001)⁶⁾によって作成された小学生用のコーピング尺度短縮版の「問題解決」、「サポート希求」、「情動的回避」、「気分転換」、「行動的回避」、「認知的回避」の6側面12項目と佐々木ら(2002)⁷⁾によって作成されたコーピング尺度(GCQ)の下位尺度のうち、「感情表出」、「情緒的サポート希求」、「認知的再解釈」から8項目を選出し、合計20項目を採用した。各項目について「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの4段階評定で回答を求め、1~4点と得点化した。

3) 学校での適応状況

過去1年間の学校生活を振り返って以下の項目

に示す経験がどれくらいあったかを問うた。

① 学校適応:「良い思い出がたくさんある」「友人と楽しい時間が過ごせた」「勉強でやりがいを感じた」の3項目

② 友人不和:「友人とのけんかが多かった」「友人に分かってもらえないことが多かった」「友人と意見がぶつかることが多かった」の3項目
各項目について、「全くない」から「よくある」までの4段階評定で回答を求め、1~4点と回答を求めた。

(2) 調査時期・調査対象

調査は、2005年3月中旬に実施した。対象は、首都圏公立中学校に在籍する1年生および2年生の計228名(男子111人・女子116人)であった。統計の分析には、SPSSVer10.0およびAmos ver5.0を用いた。

3. 結果と考察

(1) 攻撃性の構造的把握

採択した攻撃性尺度38項目について、因子分析(最尤法→プロマックス回転)を行った結果、初期解における固有値1.0以上で、回転後の因子負荷量が.35以上単独という基準で、先行研究および解釈可能性を考慮して7因子を抽出した。

結果は表2に示したように7因子構造となり、先行研究とは若干項目のまとまり方に違いが生じた。しかし内容の妥当性や因子の解釈可能性、内的一貫性の指標であるクロバックの α 係数等を勘案して下位尺度を構成した。

第1因子は、FASにおける複数の下位尺度から構成されており、内容を勘案して①「支配性・自己本位」と命名した。第2因子から第7因子までは、多くの因子においてFAS下位尺度の項目でほぼまとまったため、先行研究にならって第2因子から順に②「猜疑心」③「報復心」④「自己主張」⑤「競争心」⑥「自己顕示性」⑦「執着心」とした。第1因子は、FASの下位尺度である「支配性」の項目が中心ではあるが、複数のカテゴリから構成されており、中学生段階ではこれらの内容については、認識がまだ未分化であることが示唆される。しかしながら、他の因子のまと

表1 FAS 質問紙

下位尺度名	No.	項 目
猜疑心	1	うたぐり深い.
	7	人の言うことの裏を考える.
	16	警戒心(けいかいしん)が強い.
	26	自分以外は信用しない.
被差別感	17	不満が多い.
	27	反発したくなるようなことが, たくさんある.
競争心	8	負けずぎらい.
	18	遊びでも, 人には負けたくない.
	19	どんなことでも, 一番でない気がすまない.
	35	勝ち負けにこだわる.
自己主張	2	人にしてほしいことがあるときは, 遠慮しないで言う.
	9	反対があっても, 自分のやり方を通す.
	28	遠慮しないで, ものが言える.
	36	不満なときは, がまんしない.
支配性	3	会話では, 自分が中心になって話す.
	20	むりやり, 人に何かをさせることがある.
	29	人に対していばる.
	37	人に, 指図(さしず)することが多い.
低い言語スキル	10	不満があっても, 言えない.
	21	人と話すのは, にがてである.
	22	自分の中にこもることが多い.
	30	言い合いは, にがてである.
低い葛藤スキル	4	もめ事になると, 大きな声で相手をおさえようとする.
	11	もめごとを, おだやかに解決することはむずかしい.
	31	人と対立すると, すぐに手が出る.
	32	つごうが悪くなると, 話をしない.
偏った信念	5	自分の考えには自信を持っている.
	12	自分のしたことは間違っていないと言い張る.
	23	がんこである.
	33	自分の考えは, 人から理解されない.
報復心	13	仕返しをするときは, 徹底的(てっていてき)にやる.
	24	やられたら, やり返さないと気がすまない.
	34	何かされたら, 仕返しをしないと気がすまない.
	38	小さいことを, いつまでも根に持つ.
自己顕示性	6	人から注目されることが好きである.
	14	目立ちたがり屋.
	15	時々, おおげさなふるまいをすることがある.
	25	人の注目を引くために, 騒ぎをおこすことがある.

表2 機能的攻撃性 FAS 短縮版の因子分析結果 (最尤法→プロマックス回転)

No.	項目	因子負荷量							共通性
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	
支配性・自己本意 ($\alpha = .73$)	33 自分の考えは、人から理解されない。	0.66	0.08	0.02	-0.06	0.03	-0.19	0.01	0.43
	32 つごうが悪くなると、話をしない。	0.66	-0.11	-0.06	-0.09	0.06	-0.03	0.05	0.35
	25 人の注目を引くために、騒ぎをおこすことがある。	0.51	0.00	0.09	-0.08	-0.12	0.09	0.11	0.34
	38 小さいことを、いつまでも根に持つ。	0.50	0.17	-0.04	-0.18	-0.02	0.04	0.10	0.38
	20 むりやり、人に何かをさせることがある。	0.44	0.02	0.00	0.20	0.07	0.10	0.00	0.39
	37 人に、指図(さしず)することが多い。	0.41	0.03	0.00	0.31	-0.11	0.23	-0.04	0.46
	29 人に対していばる。	0.40	0.06	-0.04	0.37	-0.02	0.08	0.02	0.42
	30 言い合いは、にがてである。	0.35	0.04	-0.22	0.02	0.12	-0.19	-0.11	0.14
猜疑心 ($\alpha = .70$)	22 自分の中にこもることが多い。	-0.04	0.68	0.03	-0.08	-0.05	-0.04	-0.03	0.43
	26 自分以外は信用しない。	0.11	0.58	0.02	0.06	-0.09	0.04	-0.11	0.38
	16 警戒心(けいかいしん)が強い。	-0.14	0.55	0.05	-0.01	0.19	0.03	0.09	0.41
	21 人と話すのは、にがてである。	0.07	0.52	-0.02	0.08	0.06	-0.28	-0.04	0.29
	7 人の言うことの裏を考える。	-0.07	0.45	-0.06	-0.01	0.04	0.10	0.34	0.41
1 うたぐり深い。	0.12	0.32	0.02	-0.12	0.01	0.05	0.01	0.20	
報復心 ($\alpha = .83$)	34 何かされたら、仕返しをしないと気がすまない。	0.03	-0.06	0.92	0.04	-0.02	0.02	-0.09	0.81
	24 やられたら、やり返さないと気がすまない。	-0.02	0.05	0.78	-0.06	0.07	-0.13	0.07	0.63
	13 仕返しをするときは、徹底的(てっていてき)にやる。	-0.10	0.07	0.69	0.08	-0.02	0.04	0.06	0.53
自己主張 ($\alpha = .73$)	2 人にしてほしいことがあるときは、遠慮しないで言う。	-0.16	0.00	0.00	0.78	0.12	-0.11	0.02	0.56
	28 遠慮しないで、ものが言える。	-0.10	-0.07	-0.02	0.68	-0.06	0.05	0.20	0.57
	36 不満なときは、がまんしない。	0.03	-0.01	0.07	0.65	0.01	-0.05	-0.07	0.42
競争心 ($\alpha = .79$)	18 遊びでも、人には負けたくない。	-0.05	0.06	-0.03	0.11	0.93	0.00	-0.09	0.82
	35 勝ち負けにこだわる。	0.29	-0.16	0.16	-0.12	0.56	0.02	0.05	0.56
	19 どんなことでも、一番でないと気がすまない。	-0.04	0.17	-0.03	-0.03	0.56	0.17	0.05	0.50
自己顕示性 ($\alpha = .75$)	6 人から注目されることが好きである。	-0.12	-0.11	-0.11	-0.08	0.02	0.87	0.11	0.66
	14 目立ちたがり屋。	0.04	-0.11	0.05	-0.02	0.09	0.82	-0.11	0.66
	15 時々、おおげさなふるまいをすることがある。	0.06	0.22	0.04	0.03	0.06	0.52	-0.14	0.41
執着心 ($\alpha = .64$)	9 反対があっても、自分のやり方を通す。	0.07	-0.08	0.01	0.08	-0.01	-0.09	0.78	0.57
	12 自分のしたことは間違っていないと言い張る。	0.14	0.14	0.05	-0.02	-0.05	0.03	0.55	0.46
	8 負けずぎらい。	0.02	-0.18	-0.02	0.05	0.35	0.01	0.37	0.37
平方和		20.2	8.0	4.6	5.1	3.6	3.0	2.3	
累積寄与率		20.2	28.2	32.8	37.9	41.4	44.4	46.7	

表3 攻撃性尺度の因子間相関 (因子得点)

	支配性・自己本意	猜疑心	報復心	自己主張	競争心	自己顕示性	執着心
支配性・自己本意	1	0.56*	0.49*	0.24*	0.37*	0.54*	0.30*
猜疑心		1	0.33*	-0.12	0.35*	0.27*	0.28*
報復心			1	0.29*	0.44*	0.45*	0.41*
自己主張				1	0.22*	0.51*	0.34*
競争心					1	0.47*	0.52*
自己顕示性						1	0.64*
執着心							1

* $p < .05$

まりぐあいや比較的に高い内的一貫性を示していることから、1尺度として扱っていくことには支障がないと考えられる。

各因子得点相互の相関係数は、表3に示したとおりであり、相互に正相関を示しながらも、比較的に独立した側面を図っていることも伺える結果である。

(2) ストレスコーピングスタイルの類型(コーピング尺度)

選択したコーピング項目について因子分析(最尤法→プロマックス回転)を行った結果、初期解における固有値1.0以上で、回転後の因子負荷量が.35以上単独という基準で、解釈可能性を考慮して5因子を抽出した。結果は表4に示したとおりであり、第1因子は、周囲のサポートを求めるもので「サポート希求」、第2因子は、自分で問題解決に向かって努力する「問題解決」、第3因

子は、気持ちを表現する「感情表出」、第4因子は、その状況から離れるもので「回避」、第5因子は視点を変えて捉えようとするもので「再帰属」と命名した。

各因子得点相互の相関係数は、表5に示したように、「問題解決」に強く関連しているものは、「サポート希求」と「再帰属」であり、やはり学校環境における適応力は、良好な対人関係と物事を捉える際の認知的な幅広さがプラスに影響していることが示されているといえる。今回この報告では記載していないが、生徒が自然や社会や人間について、どの程度幅広く関心を向けているかを調べてみたところ、やはり、認知空間に広がりがある子どもほど攻撃性が低い状態にあることが見出されている(田中他, 2005)⁸⁾。

表4 コーピングスタイルの因子分析結果(最尤法→プロマックス回転)

No.	項 目	因 子 負 荷 量					
		F1	F2	F3	F4	F5	
サポート希求 ($\alpha=.73$)	9	だれかに励ましてもらおう。	0.81	0.10	-0.10	-0.10	-0.08
	8	だれかに問題の解決に協力してくれるように頼む。	0.71	-0.10	-0.01	0.05	0.07
	10	だれかと一緒にいて安心感を得ようとする。	0.71	-0.08	0.02	0.02	0.08
	20	だれかにどうしたらよいかを聞く。	0.70	0.06	-0.07	-0.02	0.06
問題解決 ($\alpha=.81$)	22	嫌なことを乗り越えるために努力する。	0.06	0.79	-0.18	0.21	-0.05
	3	自分を変えようと努力する。	0.03	0.58	0.07	-0.08	0.03
	13	何がその原因かを見つける。	-0.04	0.52	0.09	-0.15	0.14
	14	状況が変わるように手をつくす。	-0.11	0.49	0.04	0.02	0.33
感情表出 ($\alpha=.61$)	1	思っていることを態度に出す。	-0.13	-0.06	0.88	-0.01	0.09
	11	自分の気持ちを表情にあらわす。	0.17	0.09	0.44	0.15	-0.01
	2	自分の気持ちを受け止めてもらう。	0.28	0.26	0.33	-0.09	-0.13
回 避 ($\alpha=.49$)	21	大声を上げて怒鳴る。	-0.05	0.06	0.19	0.59	-0.18
	18	ゲームをする。	-0.08	0.04	-0.18	0.53	0.17
	23	だれかに言いつける。	0.19	-0.21	0.11	0.48	0.07
	5	どうしようもないのであきらめる。	-0.05	0.05	0.00	0.26	0.10
再帰属 ($\alpha=.52$)	12	状況のよい面を見ようとする。	0.16	0.04	0.05	0.09	0.60
	6	問題の中で明るい面をさがそうとする。	0.10	0.10	0.09	-0.06	0.48
	17	そのことをあまり考えないようにする。	-0.10	0.06	-0.06	0.22	0.33
		寄与率	22.3	6.203	5.308	5.739	2.931
		累積寄与率	22.30	28.50	33.81	39.55	42.48

表5 コーピング尺度の因子間相関 (因子得点)

	サポート希求	問題解決	感情表出	回避	再帰属
サポート希求	1	0.62***	0.48***	0.16*	0.44***
問題解決		1	0.26***	0.01	0.60***
感情表出			1	0.15*	0.27***
回避				1	-0.01
再帰属					1

* p<.05, *** p<.001

表6 攻撃性尺度とコーピング尺度の相関 (男子)

<男子>	サポート希求	問題解決	感情表出	回避	再帰属
支配性・自己本意	0.04	-0.15	0.39***	0.33***	-0.21*
猜疑心	-0.12	-0.19*	0.13	0.12	-0.07
報復心	0.10	-0.05	0.29**	0.17	-0.06
自己主張	0.29**	0.18	0.37***	0.16	0.25**
競争心	0.26**	0.33***	0.34***	0.11	0.28**
自己顕示性	0.46***	0.30**	0.55***	0.21*	0.26**
執着心	0.28**	0.22*	0.41***	0.05	0.28**

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

(3) 攻撃性尺度とコーピング尺度の因子得点の男女比較

ここでは、上で定めた、攻撃性尺度とコーピング尺度のそれぞれの因子得点および学校適応3項目と対人不和3項目の合計得点の性差を検討してみる (t検定)。

表6に示したように、攻撃性尺度では、「支配性・自己本位」だけが男子で有意に高いが、他の攻撃性では女子がいくぶん低い数値になっているものの有意な差は見られない。しかしながら、コーピング尺度では、女子が「サポート希求」、「感情表出」で有意に高く、「回避」においてだけ、男子が有意に高くなっている。また、学校適応や対人不和の得点には性差は見られていない。

(4) 攻撃性尺度とコーピング尺度との関連

学校教育場面で体験するストレスや問題解決状況において、先に見てきたように生徒の対人関係の問題や認知能力の成熟が関与していることが仄見えてきた。生徒の対人攻撃行動も、Dodge

(1991)⁹⁾が分類したようなストレスに対する生理的な反応としての反応的攻撃性 (reactive aggression) として現れたり、Crick & Grotpeter (1995)¹⁰⁾が指摘したように、対人関係上の問題から引き起こされる関係性攻撃 (relational aggression) として現れてきたりと、引き金になるものはさまざまである。したがって、コーピングの様式と攻撃性との関連性を検討することは、攻撃行動発生メカニズムを考えるうえでも、重要な視点になってくると考えられる。

ここからの分析は、特にコーピング尺度において明確な性差が見られているので、男女別に分析していくこととする。

男子では、表7に示したように、今回の調査で選択したコーピングの内容においては、攻撃性をはっきりと低減させるものは見出せたとはいえない結果である。「再帰属」が「支配性・自己本位」と、「問題解決」が攻撃性の下位尺度の「猜疑心」とわずかながら負相関を示していることが見出さ

表7 攻撃性尺度とコーピング尺度の相関 (女子)

〈女子〉	サポート希求	問題解決	感情表出	回避	再帰属
支配性・自己本意	-0.19*	-0.16	0.22*	0.32***	0.03
猜疑心	-0.27**	-0.18	0.11	0.03	0.06
報復心	-0.13	-0.28**	0.35***	0.21*	0.04
自己主張	-0.14	-0.19*	0.17	0.09	0.02
競争心	0.00	-0.04	0.33***	0.01	0.00
自己顕示性	-0.12	-0.11	0.25**	0.03	0.02
執着心	0.08	-0.01	0.32***	-0.03	-0.01

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

れるにとどまっている。むしろ逆に、コーピングの下位尺度の「感情表出」は、かえって多くの攻撃性尺度を増大させる結果になっている。「感情表出」は、ここで取り扱った項目内容の特性をよく見てみると、感情や態度をストレートに表出する傾向を示すものでもあり、行為そのものにはカタルシス効果があったとしても、もう一方では、刺激に対する反応性の高さでもあり、先述した反応的攻撃性の発生機序と重なり合ってくる側面も指摘できる。また、攻撃性尺度の中でも、「競争心」、「自己顕示性」、「執着心」などの内容は、ある面では自分自身へのこだわりであるから、必ずしも一義的にネガティブな機能だけではない側面を含んでいるとも考えられる。

攻撃性もコーピングの内容についても、こうした多義的な側面もある点に注目して、認知的決定過程に必ずしも一義的に作用する場合ばかりではないことを考慮して分析していく必要があるだろう。

女子では、表8に示したように男子よりも、それぞれのコーピング尺度はシンプルに作用していることが示唆される。「サポート希求」や「問題解決」は、攻撃性の抑制要因として機能することが推察され、攻撃性を増進するのは、「感情表出」と「回避」だけとなっている。コーピングスタイルは男子よりも女子の方が明確に分化して機能している様子が伺われる。

(5) 学校での適応状況を説明する共分散構造分析

本研究で測定した「学校適応」と「対人不和」を従属変数として、攻撃性尺度を独立変数として共分散構造分析を行った(全体で、CFI=.865, AGFI=.747)。モデルの適合性は必ずしも充分ではないが、ある程度の説明力があると考えてよさそうであり、さらにここで示された潜在変数を考えていくと、先述の先行研究でも示されたように、攻撃性が大別して2側面があるという指摘を裏付ける結果となった。攻撃性尺度の第1因子から第4因子までの4因子は、主に対人関係における攻撃性が示されており、一方、第5因子から第7因子までの3因子は、自己に拘って主張を押し通す傾向であり、それぞれを「関係性攻撃」と「自己充足的攻撃」と考えた。図1、図2に男女別の結果を示したが、同様の傾向を示している。ただし、男子においてより顕著に、「関係性攻撃」は学校適応を阻害する傾向にあり、対人不和を増長する結果となっており、「自己充足的攻撃」は、学校適応にプラスに作用し、対人不和には抑制的に機能していることが浮かび上がってくる。2つの潜在変数は、相互に相関が高いにもかかわらず、現実の学校場面では違った機能を持ちうるということが推察され、注目すべき結果であると思われる。考えてみれば、周囲のことばかりを考えて自己の欲求が全く追及されない状況が適応的であるとは考えられない。教育的介入を考える場合に

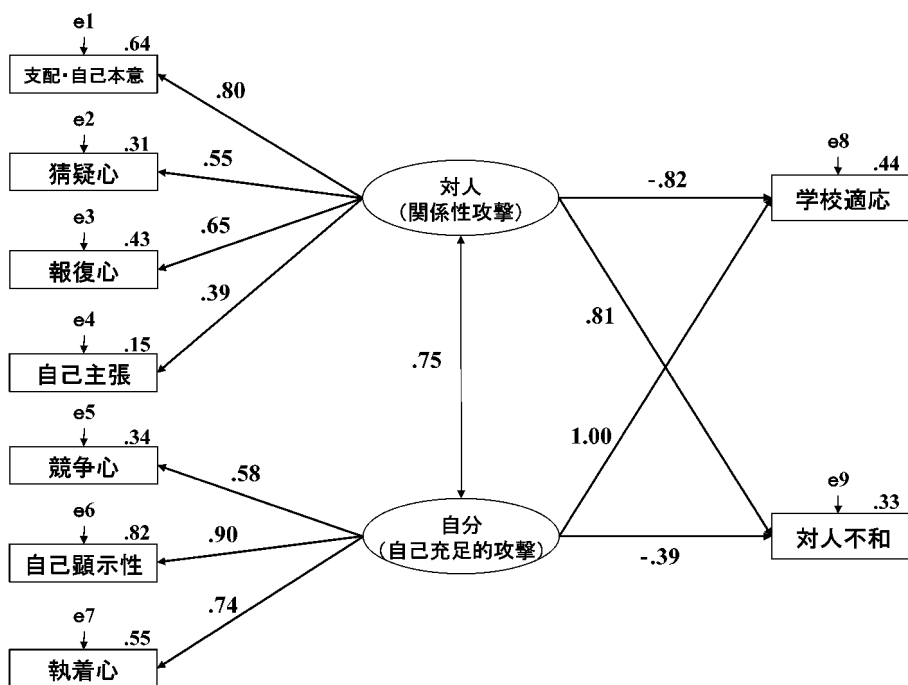


図1 攻撃性と学校適応との関係 (男子)
(共分散構造分析による)

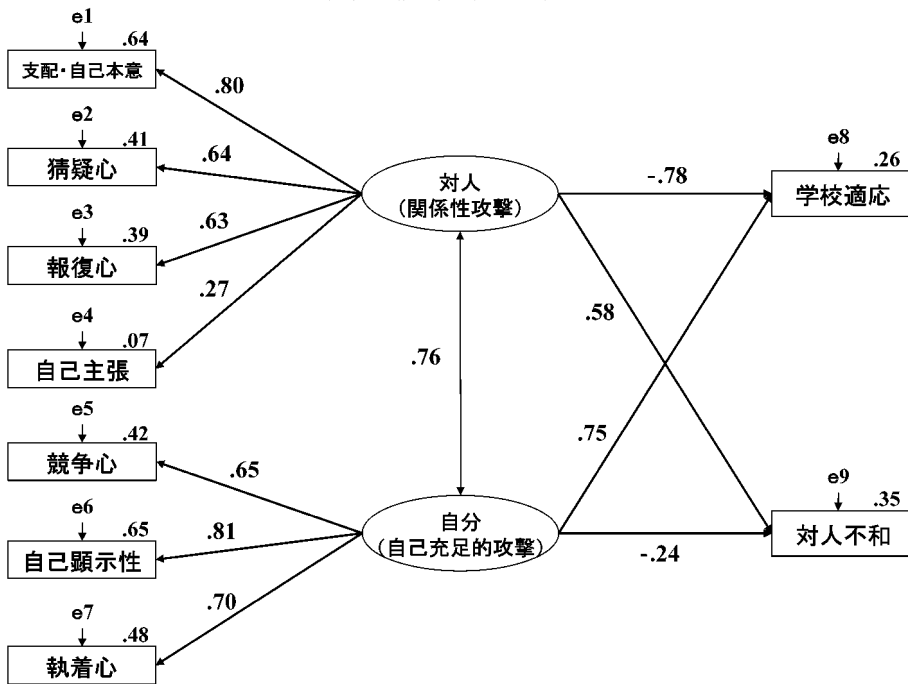


図2 攻撃性と学校適応との関係 (女子)
(共分散構造分析による)

は、集団での自己主張や自己充足が、対人関係の中で破綻をきたさない範囲で追及されることも必要であるという、言ってみれば当たり前のことが一層現実味を帯びて結果に反映されているように思われる。

4. まとめと今後の課題

(1) 攻撃性の把握

中学生における攻撃性は、攻撃行動の認知的決定要因から捉えようとする機能的攻撃性尺度によって、ある程度の確に捉えることができたと考えられる。また、攻撃性の機能の仕方が、学校適応を一義的に阻害する「関係性攻撃」と、むしろ学校適応にプラスに作用する側面ももっている「自己充足的攻撃」という2側面を持っていることが浮き彫りになってきた。また、最近の研究では、濱口(2005)¹¹⁾は、児童生徒の攻撃性を、能動的攻撃と反応的攻撃に分けて測定する視点を提出しており、こうした成果も踏まえながらより構造化された尺度を作成していかなければならない。

(2) コーピング尺度の妥当性

攻撃行動の抑制要因としてのコーピングスタイルを考えるならば、感情表出や回避のような多義的な機能を含むものはできるだけ排除して構成する必要があると考えられる。今後さらに教育的な介入の視点が見えるような内容構成を考えていく必要がありそうである。

(3) 生徒の問題行動の把握

今回は、自己申告での学校適応感や対人不適応を取り上げたが、児童生徒の客観的な状況を教師等の他者評価によって捉えることも必要になってくると思われる。

注：この調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究C(2)課題番号16530458(研究代表者田中純夫)の助成を受けて実施した調査の一部を使用している。

攻撃性尺度(FAS)作成の試み—暴力犯罪・非行との関係— 犯罪心理学研究, 37, 1-13

- 2) Dodge, K. A. & Coie, J. D. (1987) Social information processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1146-1158
- 3) 坂井明子, 山崎勝之(2003)小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響, *学校保健研究*, 45, 65-75
- 4) 玉木健弘(2003)小学生における攻撃性が社会的情報処理に及ぼす影響, *犯罪心理学研究*, 41, 1-16
- 5) 坂井明子, 山崎勝之, 蘇我祥子, 大芦 治, 島井哲志, 大竹恵子(2000)小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討, *学校保健研究*, 42, 423-433
- 6) 大竹恵子, 島井哲志, 蘇我祥子(2001)小学生のコーピング尺度短縮版の作成, *ヒューマンサイエンス*, 4, 1-5
- 7) 佐々木恵, 山崎勝之(2002)コーピング尺度(GCO)特性版の作成および信頼性・妥当性の検討, 49, 399-408
- 8) 田中純夫, 水野基樹, 山田泰行, 杉浦 幸, 菊地奈美, 今野 亮(2005)生徒の対人攻撃場面における認知とコーピングスタイル 日本教育心理学会第47回総会発表論文集 118
- 9) Dodge, K. A. (1991) The structure and function of reactive and proactive aggression. In D. J. Pepler & K. H. Rubin (Eds.) *The development and treatment of childhood aggression*. Hillsdale, N. J: Lawrence Erlbaum. pp. 201-218
- 10) Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995) Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722
- 11) 濱口佳和(2005)能動的攻撃・反応的攻撃の概念定義と測定法に関する考察—青年期における能動的攻撃・反応的攻撃の個人差測定尺度開発にむけて筑波大学教育研究科カウンセリングコース教育相談研究, 43, 27-36

引用文献

- 1) 大淵憲一, 山入端津由, 藤原則隆(1991)機能的

(平成17年10月7日 受付)
(平成17年11月28日 受理)